

編集後記

研究所設立40周年記念号となった『社会と倫理』第35号では、特集として13本の論考、投稿論文として1本の論考を収録した。

特集「社会倫理の可能性」では、社会倫理研究所40年の歩みを記念して、現在、専任、兼任、あるいは非常勤のスタッフとして研究所活動に携わっている研究者から、それぞれが現在取り組んでいるテーマに関する論考を寄稿していただいた。予想通り、取り扱うテーマも多種多様であり、背景となる専門分野も、環境経済学、倫理学、社会学、行政学、法学、歴史学、国際政治学、国際関係論など多岐にわたるものとなった。

10年前の30周年記念号と今号の両方に寄稿いただいたのは、香坂氏、丸山氏、中野氏、眞嶋氏である。香坂氏の論考では、環境保護をめぐる政策実践の現場での重要概念の用いられ方の変遷をめぐる状況が示されている。丸山氏の論考では、新たに国内精神医療の法的な問題が提起されている。中野氏は、グローバルな規範と主権国家システムの歴史的・構造的な問題を論じている。また、眞嶋氏は、戦争倫理と研究倫理の交叉点で、軍事研究認定の問題を論じている。四氏ともに、10年の歳月を経て、一貫した問題意識のもとに自らの研究を進展させておられる様子が窺われる。

この10年間で新たに研究所活動に参画していただいた阪本氏、三好氏、石田氏、そして、かつて第一種研究所員として共に研究所を支えてくださった鈴木氏、大庭氏、竜橋氏にもご寄稿いただいた。阪本氏は、プライバシー論の観点からの監視社会化批判の新たな可能性を見据えて関連する論争史を批判的に捉え論じている。三好氏は、日中戦争における正戦論的な側面をカトリック教会の観点から別決することを試みている。また、石田氏は、使用できる兵器と使用できない兵器に引かれた一線を踏み越えない慣習の反復が有する安全保障上の意義について論じる。鈴木氏は、倫理学上の主要な枠組である複利主義について様々な側面から包括的な視点で批判的に検討する。さらに、昨今、国際政治学から応用倫理学へと自身の専門的射程を広げつつある大庭氏からは、いわゆ

る「トロッコ問題」に代表される哲学的な思考実験がもちうる様々な実践の可能性を見据えた論考が届けられた。そして、竜橋氏には、自身の主たる研究課題である「クリティカル自然資本」論の一環として、既存の枠組みとの対照を通じて「関係価値」に新たな位置付けを与える野心的な論考をお寄せいただいた。

また、現在の第一種研究所員からは、大きな環境変化に直面する人間の同一性について考察した奥田の論考、インドネシアの村落基金に関する最新の情報に基づき、そのありように対して補完性・レジリエンス・持続可能性を構造的に読み込んだメレの論考、自殺対策をめぐる政策過程の制度的問題点をフィンランドと日本の実例を用いて照らし出した森山の論考が寄稿されている。

以上、いずれも現在の社会倫理研究所が取り組む研究の方向性（＝社会倫理の可能性）を指し示す力作であり、お楽しみいただけたと思う。

投稿論文では、応募された1本の論考の中から査読プロセスを経てその1本を収録した。山口晃人氏の論考は、昨年熱く論じられているロトクラシーの価値について、選挙代表政との比較を通じて分析的に検討する明晰な論考である。

最後に、本号には、12本の書評が収録された。特に、研究所の懇話会にも登壇していただいたことのある宮野真生子氏が夭折されたことへの哀悼の意を表すべく、彼女の最後の作品となった2冊を彼女との縁の深い2人に評していただくことができた。他の書評も力作揃いであり、秋の夜長の友としていずれも遜色のないものと自負している。

今号の編集作業は、御多分に洩れず、2020年春以降世界を席卷したCOVID-19対応の影響を避けられなかった。早々に原稿を提出してくださった方には刊行の遅れをお詫び申し上げたい。予想外の40周年の一年となったが、様々な「想定外」についての考察を常に視野に入れて活動を進めてきた社会倫理研究所にとっては、それなりに相応しい次の10年への幕開けとなったと思う。次号の特集企画もすでに立ち上がり始めている。次の10年間も乞うご期待。

W・S・メレ、森山花鈴、奥田太郎